

# 私学の独自性を生かした国語科教育法プログラム

- 言語感覚の感得を目指して -

松本有子(会津若松ザペリオ学園中学・高等学校教諭)

## 1. はじめに～ PISA ショック～

平成16年12月に、「生徒の学習到達度調査」(PISA 2003 : Programme for International Student Assessment 2003)の結果が発表された。PISA 調査は OECD(経済協力開発機構)によって行われ、今回の調査では41カ国・地域が参加し、日本では、平成15年7月に、高校1年生約4,700人を対象に実施された。知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるのかについて、次の4分野にわたって調査された。

(1) 読解力 (2) 数学的リテラシー (3) 科学的リテラシー (4) 問題解決能力

この調査の特徴は、今述べたように、知識や技能の「実生活」における活用、つまり「知識の運用能力」の程度を調べるものである、ということであった。これはいわゆる「生きる力」をみるものであるが、日本の学校教育の現場では、こうした「運用能力」を問うテストが行われることはない。それでも日本の高校生は「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」「問題解決能力」の得点については健闘し、いずれも1位の国とは統計上の差がなかった。深刻な問題は、「読解力」の低迷であった。

ここでいう「読解力」とは、これまでの教科としての国語における「読解力」とはかなり異質であり、PISA 調査における「読解力」のは次のようなものである。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

このような定義のもと、「義務教育修了段階にある生徒が、文章のような『連続型テキスト』及び図表のような『非連続型テキスト』を幅広く読み、これらを広く学校内外の様々な状況に関連付けて、組み立て、展開し、意味を理解することをどの程度行えるかをみる」ことをねらいとしてこの調査は行われた。

PISA の「読解力調査」には2つの観点がある。読解の「プロセス」と「出題形式」である。日本の高校生の場合、「プロセス」の「情報の取り出し」と「解釈・情報の取り出し」と、「出題形式」の「多肢選択」に関しては他の国よりもよい数字を残した。問題は、「プロセス」の「熟考・評価」「解釈」「出題形式」の「自由記述」である。

日本の高校生が他の国よりも苦手としている「熟考・評価」「解釈」の問題は、次のようなものである。

テキストの表現の仕方に着目する問題

テキストを評価しながら読むことを必要とする問題

テキストに基づいて自分の考えや理由を述べる問題

テキストから読み取ったことを再構成する問題

科学的な文章を読んだり、図やグラフを見たりして答える問題

例えば、「インフルエンザの予防注射を呼びかけるチラシ」というテキストの内容に関して、このチラシが「内容的に妥当か」「レイアウトなどは効果的か」などについて考えることである。

しかし、文部科学省がより深刻に受け止めたのは、上記のような問題に対する正答率の低さではなく、「自由記述」問題における「無答率」の高さであった（無答率が OECD 平均より 5 % 以上高い問題数の割合はなんと 60.0 %）。日本の高校生は、自由に答えよという問題にほとんど対応できないのである。選択肢（多肢選択）や抜き出し（情報の取り出しは得意でも、考えたことを表現する力が不足している）。「生きる力」を標榜した学習指導要領の成果を、同じ「生きる力」を目的とした PISA 調査によって否定された形となった文部科学省は、非常に大きなショックを受け、「PISA 調査（読解力）の結果を踏まえた指導の改善」を作成し、「指導の改善の方向」を示した（「読解力向上に関する指導資料～ PISA 調査（読解力）の結果分析と改善の方向～」平成17年12月文部科学省）。

## 2. 研究主題の設定の理由

文部科学省が示した改善の方向とは、大きく分けて 2 つある。

- |  |
|--|
| (1) 「国語科」の指導内容の改善<br>(2) 教科横断的な学校全体での読解力向上の取組み |
|--|

(1) は、これまでの学習指導要領（国語科）の内容をより徹底させるという方向である（PISA 調査の目的と学習指導要領の目的が軌を一にしていること、よって学習指導要領の方向性は間違っていないということを前提としている）。

「話すこと・聞くこと」の領域の改善 相手の意図を理解しながら話し、聞く活動。

「書くこと」の領域の改善 相手や目的に応じて効果的な文章を書く活動

「読むこと」の領域の改善 目的や意図に応じて的確に読み取る活動

(2) は「読解力」を、いわゆる教科国語の領域に限らない広い意味の「国語力」とする立場である。「改善の方向」(前出・文部科学省)には「読解力は、国語だけでなく、各教科、総合的な学習の時間など学校の教育活動全体に関連付けていくべきものであり、教科等の枠を超えた共通理解と取組の推進が重要である」とある。

以上を踏まえ、今回、研究主題を次のように設定した。

研究主題 私学の特性を生かした国語科教育法 ～言語感覚の感得を目指して～

研究主題設定の理由

小説・詩・短歌・俳句・漢詩などの文芸作品を教材とし、「作者の表現の意図はどこにあるか」「作者の表現はどのような効果をもたらしているか」に注意して読むことを生徒に意識させ、その表現に用いられた「ことば」と生徒自身の生活体験・生育環境などから得ている「ことば」との比較を通じ、言語感覚を磨く〔2.(1)〕。また、実生活に即したテキストを使い、「読解力向上」を目指す。さらには、私学の特性を生かし、教科横断的な学校全体としての「読解力向上」の取組み案を策定、実践する〔2.(2)〕

### 3. 研究計画

#### (1) 授業改善の取組み

授業に関しては言語感覚の感得を基本として次の4点を意識した。

作者の意図を考える

用いられている「ことば」の必然性を読み取る

「自分なら」どのような「ことば」を用い、どのように「表現する」かを考える  
考え、話し合ったことを発表する機会を必ず設ける

#### (2) 「読解力向上」の取組み

各教科における「読解力向上」の取組みへの支援計画を次のように立て、実践した。

PISA型「読解力」についての理解を広める

実践例を提示する

資料：『読解力向上に関する指導資料』（平成17年12月文部科学省）

『読解力向上のための指導事例集』（平成18年3月学力向上拠点形成事業「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」事例集作成委員会）

研究会の開催

### 4. 実践

#### (1) 「国語科」の指導内容の改善に関する実践

【実践例1】教科：国語総合 対象学年：1年

芥川龍之介『羅生門』と『今昔物語集』

1. 目的 『羅生門』に隠された芥川龍之介の意図を探る

2. 方法 『羅生門』と『今昔物語集』（巻二十九第十八）との記述の違いを見つける

芥川龍之介が表現を変えた理由を考える。

2つの作品の表現の違いが、作品全体の雰囲気やテーマにどのような違いをもたらしてるかを考える。

自分だったら『今昔物語』のどの部分を変えるかを考える。

注目した記述の違いによってグループ分けをし、研究した成果を発表する。

### 3. 内容（概略）

『今昔物語集』 卷二十九第十八「羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人の語」

今は昔、摂津の国のほとりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ暮れざりければ、（中略）見れば、火ほのかにともしたり。盗人、あやしと思ひて、連子よりのぞきければ、若き女の、死にて臥したるあり。（中略）盗人これを見るに、心も得ねば、これはもしや鬼にやあらむと思ひて恐ろしけれども、もし死人にてもぞある、脅して試みんと思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「己は。」と言ひて走り寄りければ、嫗、手感いひをして、手を摺りて惑へば、（中略）嫗、「己があるじにておはしましつる人の失せたまへるを、あつかふ人のなければ、かくて置きたてまつりたるなり。（中略）このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたとや。

『今昔物語集』 卷二十九第十八 と『羅生門』の設定の違い

	『今昔物語集』	『羅生門』
傍線部 主人公の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂津の国から来た</li> <li>・盗みをする目的</li> <li>・年齢年代不詳</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出自不明</li> <li>・暇を出された「下人」</li> <li>・することがない</li> <li>・若い男（「にきび」から）</li> </ul>
傍線部 主人公の心情	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不審の内容が具体的</li> <li>・行動の動機が具体的（「脅して試してみよう」）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不審の内容が抽象的（悪に対する憎悪、正義感とあるが根拠なし）</li> <li>・行動の動機が抽象的</li> </ul>
傍線部 老婆の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・死人となっている女に仕えていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不詳</li> </ul>
傍線部 全体の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「盗人」自身の語り（の伝聞）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第3者（作者・芥川）の語り</li> </ul>

（ 卷第三十一第三十一「太刀帯の陣に魚を売る嫗の語」は省略）

『羅生門』の設定の意図（生徒の意見の例）

主人公の設定～ ・「下人」が目的もなく途方に暮れているという設定にすることで、全体的な不安感を強調している。

・悪の道と正義の道の間で揺れ動く心理状態を提示しやすくするために「下人」を価値観の定まっていな若い男と設定している。

主人公の心情～ ・言動の根拠を「下人」の主観に沿う形にすることで、ストーリー展開の理不尽さを和らげている。

・客観性を排した主観的な心理描写によって、恐怖感や不気味さを強調している。

- 老婆の設定～ ・最後まで得体の知れない人物にすることで、恐怖感や不気味さを強調している。
- 全体の設定～ ・第3者の視点にすることで、読者を物語世界に引き込むことに成功しており、かえって臨場感が出ている。

自分だったらどのような設定にするか（生徒の意見の例）

- ・「盗人」を「貴族」にする。主人公を世間知らずにする~~こと~~で、もっと悩ませる。
- ・「老婆」をきれいな若い女の人にする。主人公と恋に落ちることで、二人で助け合う。
- ・「老婆」の語りにする。 ・物語を現在の世界に。 ・「下人」が「老婆」に負ける。etc

#### 4. まとめと課題

教材としての小説を丹念に読解していくことはそれなりに意味がある。しかし、そのような読解中心の授業方法では、授業者の解釈に偏ったり、指導書の内容に沿ったりする形となるため、作品に生徒が主体的にかかわっていく場面は少ない。この授業では作者の選んだ「設定」に注目し、さらに、自分ならどのような「設定」にするかを考えることによって主体的な読みを実現しようと試みた。

作品と異なる「設定」にすることで、作者と自分との発想や伝えたいことの相違に気づく方法としては非常に有効であり、いわゆる「教科書的な読み」にも意味があるのだという理解につながったと思われる。ただし、「自分だったらどのような設定にするか」の作業については、例えば波線部のようなテーマの変化にまで言及した意見は少なく、ほとんどが単なるストーリーの改変にとどまってしまった。今後は、「自分ならどのようなテーマにするか」という想定に時間をかけてみたい。

【実践例2】教科：国語総合 対象学年：1年

#### 唐詩を読む

1. 目的 唐詩の「ことば」の表現意図を読む

2. 方法 「静夜思」の「ことば」を変えると印象や意味はどう変わるかを話し合う。  
「牀（ベッド）」が、もし「        」だったら？ / 「霜」が、もし「        」だったら？ / 「山月」が、もし「        」だったら？  
「牀」「霜」「山月」である意味を考える。  
「月」が描かれた他の漢詩を読む。  
自分の「さびしい」体験を漢字だけで表わしてみる。

3. 内容

「静夜思」李白（生徒の意見の例）

牀 前 看 月 光 / 疑 是 地 上 霜  
拳 頭 望 山 月 / 低 頭 思 故 鄉

作者が選んだ「ことば」について考える（生徒の意見の例）

- ・「牀（ベッド）」が、もし「        」だったら？ 椅子 机 扉 彼 彼女 etc

**想定** 椅子や机だと、座って考え事をしており、そこに月光が差し込んできたことになる。  
**解釈** 眠れずに故郷のことを考えていて、月光には気づかなかつた。はっと思って窓の外を見た。

**「牀」の意味** 月光に気づかないのはおかしいので、やはり「牀」の方がよい。月光が差し込んできたのでふと目が覚めた、という情景がよい。月光に「気配」があったという感じがする。

・「霜」が、もし「 」だったら？ 雪 火星 etc

**想定** 火だと月光が赤いということになるし、雪だと白い光がたくさんあるという感じ。

**解釈** 火でも雪でも、光の度合いは強くなる。

**「霜」の意味** 月光は、白く輝いているが太陽のように強い光ではなく、しかも、床に薄く広がっている感じがする。よって「霜」の方がよい。

・「山月」が、もし「 」だったら？ 川 海 街の灯り etc

**想定** 窓の外には川や海のような広々とした光景が広がっている。雄大な中国の景色。

**解釈** 少年の頃を過ごした故郷の川や海的情景を思い出している。

**「山月」の意味** 川や海だとすると、作者の視線が平行か下に向く。そうすると、ずっと下を向いていることになり、「拳頭」と「低頭」の対句が成立しない。また、川や海の場合、水の流れる音や波の音を詩の中にいれなければならない。さらに、「月」は故郷でも他の場所でも同じ「月」なので、故郷を思い出す時に見るものとして「月」は、最も適当だと思う。

#### 4. まとめと課題

漢詩の場合、一つの文字が持っている意味は広く、また深い。よって、一つの漢字の意味を正確に知ること、いくつかある意味の中から文脈上最もふさわしい意味を当てはめること、それに基づいて全体を解釈すること、その解釈に必要な時代背景や作者の人生などをきちんと把握すること、などが漢詩の授業の中心であった。

芥川龍之介『羅生門』の授業でも触れたが、上記のような漢詩の授業では、やはり生徒は受身になり、授業者の口語訳を待つということになってしまう。歴史的な背景などについては、例えばグループ学習形式で調べるなどの、やや能動的な学習も可能であるが、多くの場合、結論は同じなのであまり意味はない。

そこで、この授業は、設定ではなく「自分だったらどのようなことばにするか」という想定をすることで、作者の選んだ「ことば」の持つ意味を探ることを目標としたが、結果としては非常に有効であったと思われる。「設定」を変えるよりも「ことば」を変える程度の想定の方が、生徒にとっては取組みやすかったのではないか。様々な「ことば」が飛び交い、それに基づいた自由な発想、解釈も行われ、活発な授業となった。生徒自身の言語感覚の確認にもなり、最終的には作者の選んだ「ことば」の意味を深く読み取ることになった（以上、上記波線部）。

課題としては、自分の「さびしい」気持ちを漢字だけで表わす段階になった時に、「漢字の知識」の不足が障害となったことである。高校生が使える漢字はごく少数であったために、ほとんどが「淋」「寂」「泣」「涙」などであった。しかし、漢字学習の一つの新しい方法として成り立つ可能性はあるのではないかと感じている。

【実践例】 教科：現代文 対象学年：2年

難解さを乗り越える - 『山月記』への挑戦

1. 目的 難解な語句や漢詩を含む作品を楽しみながら読み通し、入物の心情を理解する力や解釈する能力を養う

## 2. 方法・内容

読み間違いを探す。

間違いを含むプリントを配布し、設定や重要語句、語彙への注意を喚起させる。

例) 隴西の李徴は博学才叡、天井の末年、若くして名を牛莠に連ね、次いで江南尉に補せられたが、性見解、自ら侍むところすこぶる厚く～

主語は誰かを正確に把握する。

漢詩の前までの内容理解をクイズ形式で確認する。

例) この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。誰の台詞かを正確に把握する。

漢詩の前までの人物関係と話の流れをクイズ形式で確認する。

例) 危ないところだった。

漢詩に題名をつけさせる。

登場人物の心情を理解するために漢詩の読み方を復習する。

配役を考える。

登場人物の性格を読み取って言語化する。

この小説を映画化するとしたら、どの俳優がふさわしいかを考え、その理由を説明する。

## 3. まとめと課題

この授業の内容そのものは、従来行われていた『山月記』の解釈の域を超えるものではない。注目すべき箇所も、問題となる箇所も定まってしまうこうした古典的名作は、方法を工夫するしかないものと思われる。芥川龍之介『羅生門』では、「作者の意図を読む」ことを目標とし、手段として「設定を変えてみる」という「想定」を用いたが、ここでは「クイズ形式」を行ってみた。

特に「本文の間違い探し」についての生徒の反応はよく、ややもすると読むことを拒否してしまいがちな難解な文章や漢字に対し集中して臨むことができたようだ。実際に定期考査では、漢字・語句の問題の正答率が80%を超え（通常は40%）、楽しみながらも学習効果が上がったと言える。非日常的な「ことば」に対する苦手意識を取り除く一助ともなった。

また、生徒が主体的に活動したのは、「配役を考える」であったが、この種の作業に多くの時間を割くのはかえって逆効果であった。やはり、作品そのものの力を考えれば、「設定を変えてみる」「ことばを変えてみる」「クイズ形式で本文に集中させる」などが工夫の限界であり、それ以上は単なる遊びになってしまうのだと感じた。

【その他の実践例1】教科：国語表現 対象学年：3年

### POP（ポップ）を作る

1. 目的 読書によって得た感動や、学んだことを他者に伝えるための効果的な表現を考える

2. 方法 「おすすめの1冊」を選ぶ  
気に入った一節を抜き出す。  
おすすめの理由を書く。  
選んだ1冊のキャッチ・コピーを考える。  
POPを作成する。

### 3. 評価の観点と課題

今回は国語表現の中で実施したが、これは LHR や総合学習の時間を使ってできるとよい。なぜならば、POP は作成することが目的ではなく、実際にそれを目にした客の購買意欲をかきたてなければ意味がないからである。つまり、授業で作成した POP を、地域の書店などで実際に使用してもらい、その成果を追跡調査しなければならなかったのではないか。

従来の「表現」の領域は、自分の意見や感想を文字通り「表現」することを目的としていたが、主眼は「伝える」ことに移りつつある。「表現」はどの程度伝わったのか、という評価をしてはじめて成り立つとの観点から、こうした実践を積み重ねていきたい。

#### (2) 教科横断的な学校全体での読解力向上の取組みに関する実践

これからの「国語力ー読解力」という考え方の普及

先に述べたように、PISA 調査で明らかになった日本の高校生の読解力不足は、文部科学省の認識においては「国語科のみならず、全体の問題」である。しかし、実際の教育現場ではそういった認識はあまりないと思われる。

「国語はすべての教科の基本である」という「国語」についての漠然とした定義や、「英語を訳した日本語がなっていない」「数学の文章題ができなくなっている」といった嘆きを耳にすることはあるにしても、生徒の「国語力不足」を国語以外の教科が「課題」として取り上げることはまずない。

「対策」となれば、ほとんどの場合、国語科任せである。文部科学省の研究指定を受けた学校または地域で行われている「国語力向上」の事業も、多くは「カリキュラム」「(小)中高連携」に重点を置いており、基本的には「国語科」での研究であると位置づけられているようだ(本県では平成16年度・17年度に県立只見高校が指定を受け、同地域の小・中・高校連携によるカリキュラムの研究を行った)。

しかし、組織的に取り組む際に中心的役割を担うのはやはり国語科であろう。そこで、国語科を「読解力向上委員会」とし、今回、PISA 型「読解力」の向上に取り組むにあたり、教科横断的なカリキュラムや研究会を設定しやすい環境にある私学の特性を生かし、まず、このような状況を改善するために次のことを行った。

PISA 調査と結果を知らせるための資料の配布

- ・『読解力向上に関する指導資料』(平成17年12月文部科学省)
  - ・『読解力向上のための指導事例集』(平成18年3月学力向上拠点形成事業「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」事例集作成委員会)
- 「PISA 型読解力」の必要性を知ってもらうための資料の作成

研究会など

研究会の開催については以下のような2年計画を立てた。

〔平成18年度〕国語科において、PISA 型読解力を念頭に置いた授業改善を行う。

文学的教材 ~ 設定・表現における「作者の意図」を読み取る授業の展開



国語表現 ~ 自分の意見や感想を効果的に相手に伝える授業の展開

研究授業の実施（年間3回）【(1)の実践例参照】

〔平成19年度〕他教科においても、PISA型読解力を念頭に置いた授業改善を行う。

評論的教材 ~ 論理的思考手順を書く際にも応用する授業の展開

他教科 ~

数学 例) 公式の意味を考える

理科 例) 実験の仮説・記録・結果のまとめを、他人に分かりやすく伝える工夫

英語 例) 英語の構造を研究する

社会 例) 社会学的調査の実施と成果の発表

全校をあげての研究会の開催

【参考】これからの時代に求められる【国語力】の構造（モデル図）

「これからの時代に求められる国語力について」(H16.2.3 文化審議会答申より転載、加筆)

